

# 難聴幼児への絵日記を使った言語指導

— 保護者の関与を促進するための工夫 —

○佐々木あき子<sup>1)2)</sup>

庭野賀津子<sup>1)</sup>

東北福祉大学大学院教育学研究科<sup>1)</sup> 仙台市立長町小学校<sup>2)</sup>

KEY WORDS: 難聴幼児, 絵日記, 保護者支援

## 【目的】

幼稚園教育要領の「言葉」の領域には、「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。」とある。

聴覚障害幼児の言語の習得のために用いられるものは様々あるが、絵日記もその一つである。小学生が書く絵日記は、自分でかきたいことを決めて絵を描き、それについてある程度獲得した自分の言葉を使い、自分の経験を書くものである。また、アサガオなどの植物について生活科などで観察日記として書く場合もある。しかし、聴覚障害幼児にとっての絵日記は、小学生が書く絵日記とは目的が異なる。聴覚障害幼児にとっての絵日記は、親（主に母親）、あるいは親子で書くものである。そして内容については、日常生活の中で起こる様々な出来事の中から子供が心を動かしたことでなく、子供に覚えてもらいたいと思っている言葉を取り上げられる内容を選ぶこともある。また、言葉の定着を図り、言葉の使い方を広げたりなどの言語の力を高めることやコミュニケーションのツールとして絵日記を活用している。このように絵日記を活用していくためには、保護者の役割が大きいと、絵日記を使った関わり方や、話題の取り上げ方などをていねいに支援する必要がある。

そこで、本研究では新生児聴覚スクリーニングにおいて Pass であった故に難聴の発見が遅れ、2歳近くになってから重度難聴と診断された幼児に対して、絵日記を用いたセッションを実施した。セッションの中で、保護者には絵日記で取り上げる内容について提示したり、取り上げた言葉を絵カードにしそれを集めた『絵じてん』にして見せたり、関わり方を見てもらったりした事例について報告する。

## 【方法】

**対象児**：先天性両側高度感音難聴の女兒。両親は日本語を母語とする聴者で本児は第1子。「ことばが出ない」という保護者の主訴により23か月時に医療機関を受診し、高度難聴と診断を受ける。新生児スクリーニング検査時では Refer とならず、また、乳児期に日常的に音声の表出が見られたことから、難聴の発見が遅れる。難聴の診断後、直ちに補聴器装用を開始するが補聴効果は乏しく、諸検査の結果、人工内耳適応と判断された。26か月時に右耳に人工内耳装用、44か月時に左耳に人工内耳装用。医療機関で週1回の言語指導を受けている。なお、本児は「津守式乳幼児精神発達質問紙」により、「言語・理解」以外の「運動」「探索・操作」「社会」「生活」において年齢相当の発達が確認されている（33か月時）。38か月には、聴覚特別支援学校幼稚部に入学した。

**手続き**：40か月から48か月までの9か月間、月3～4回の頻度で①聴覚活用、②発音指導、③絵日記やトピックスを中心とした1回30～40分間のセッションを行い、その様子をVTRに記録し分析した。事前に母親に、絵日記に取り上げる内容や関連する言葉を、月別に表したものを作成（絵日記内容表）し配布した。また、絵日記で取り上げた言葉を絵カードにし、それを集めた『絵じてん』を作成した。

**評価**：セッションの絵日記指導の中で、対象児が話した最大

文長の発話を3発話取り上げ、そこから形態素数を分析し、その平均値（平均発話長：MLU）を比較した。発話については音声に限って取り上げた。

## 【結果】

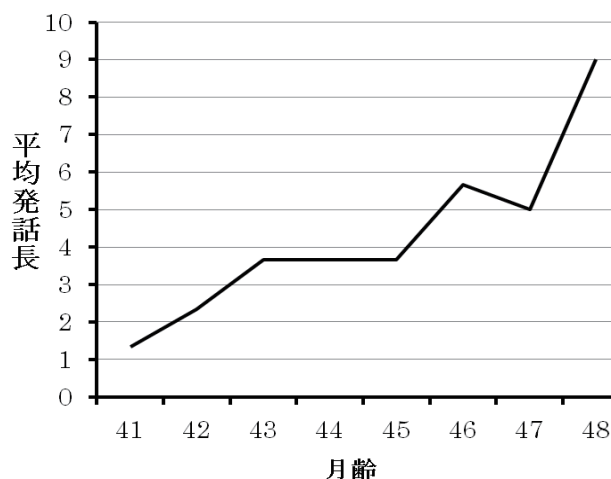


図1. 平均発話長の発達的变化

41か月では、発話が限られており、単語レベルでの発話がほとんどであった。また発話は手話と一緒に見られた。42か月では単語だけでなく2語文の発話が増えてきた。43か月では形態素数が6以上の文が見られてきたが、「○○ちゃん、○○ちゃん、○○（自分の名前）」など人の名前で長くなっているものもあった。44か月では、行為者—行為、行為者—場所—行為などの発話が見られるようになってきた。45か月では、「パパ だいじょうぶ こわくない」など自分以外の相手の様子について話すようになった。46か月では「○○（自分の名前）べんきょう おわったね」など助詞はないものの、文として話すことができるようになった。47か月では、「これは○○先生はもらった」など間違いもあるものの助詞を使った発話が見られるようになった。48か月では、「○○さんのお家で絵をかいたよ」など発話が複雑になってきた。

絵日記は家庭での日常的な出来事や、出かけたことなどが書かれていた。母親が就労しているため、毎日書くことは難しい様子だったが、絵日記内容表を参考に内容を選定していた。また、絵日記で取り上げた言葉を『絵じてん』にしたことで、言葉の属性や上位概念の形成につなげることができた。

## 【考察】

絵日記を使いながら経験の言語化を促したことにより、最大文長が長くなってきたと考えられる。母親が絵日記内容を参考にしながら絵日記の題材を選んだことにより、偏りのない内容となったと考える。また、セッションの中で使用した単語や絵日記に出てきたことばを絵で確認し、カテゴリーに分けて絵を貼り付けた絵カードを作成し、新出単語と結びつけたり、経験と照らし合わせたりしたことが語彙の発達に有効であったと考えられる。母親もセッションのときには、本児が伝えきれないことを補うなどの支援により、本児と報告者がよりよい関係を作れるよう協力的に関わってくれた意義も大きいと考える。

(SASAKI Akiko, NIWANO Katsuko)